

古代山城に就いて

七 森 義 人

忘年会で「あなたの研究テーマは？」と聞かれてしまった。最近どうも私は何をテーマとしているのか誤解されている様だ。それに加茂町の芋原や、神辺町の木之上城の事で、何やら騒がしい。そこで古代山城とは何かを、今までの研究がどの様になつていのかを簡略に記して、今後、備後の古代山城がどこにあるのかを考える参考になればと思う。

古代山城とは

最初に述べた古代山城は、続日本記に記されている、常城、茨城の事であるが、古代にある城という意味から述べてみる。

城とは、集団が戦いに備えて一定の地域の地形を利用、改変して築いた防禦施設の事である。

つまり、縄文時代より弥生へと移り、人々が稲作等により、土地に定住して、集落が形成される。そして、米作り等の為に、それを指導するリーダー的な地位が生まれ、そのリーダーのもとに他集団との土地、水利等の権利等を争う事になる。此争いから、他集団の侵入や、戦いを防ぐ為に城が生まれる。

最初は戦いをする人と、農耕をする人という様に役割は別れていなかったが、集団が攻争の結果、他集団の地域も得て、広い地域となり、数十人程度の集団が、数百、数千人となり、集団内に階層が生まれ、農耕をする人と、戦う人に別れてくる。

集落も住居が集まっただけのものから、集落の外に溝、柵、土塁等を築いたものが出来てくる。(城の発生)。それと共に、集落が農耕に不向きな高地に出来る。(高地性集落)^{注⑧}

更に時代が進むと、朝鮮半島との交流の証か、兵器庫等の純軍事的な施設を土塁や石垣等で囲む施設が発生する。(神籠石式山城、朝鮮式山城)。

神籠石式山城

官書に記されていない城の事で、明治31年に小林庄次郎氏が、福岡県久留米市の高良山にある。高良神社を囲む様になつている列石の山頂部分にある巨石を地元民が「神籠石」と呼び、その列石を神聖なものを囲む境界石と考えた。(靈域説)。そして、此様に山を囲む列石を神籠石

と呼ぶ様になった。

その後、八木装三郎氏が、高良山、雷山、女山、鹿毛馬の神籠石を見聞して、此らの遺構を城郭と考えた。更に同氏によって、中国、朝鮮、日本の城郭用語、日韓古城跡を比較し、此遺構を朝鮮式山城と関連があると考えた。(城郭説)。

更に戦後になると、おつば山、帯隈山、石城山等が発掘調査されて、

此石列は土塁の根止め石と云う事がわかり、更に土塁に柵があったと云

う事がわかり、此により、此神籠石は城郭であると云う事が確認された。

此遺構の築城時期は不明だが、二世紀から十世紀までの諸説があるが、柵の柱穴の間隔や、神籠石の水門の築造技法等から、大化改新に近い時期が有力視されている。

朝鮮式山城

注⑦ 文献史料に記されている城の事で、その出現が白村江の戦いで、日本

が敗退して、西日本に新羅からの侵入の僅機の為に、亡命百済人の指導

のもとに、築いたとされる七世紀以降の山城を、朝鮮半島の山城と類似

の為に、朝鮮式山城と呼ぶ様になった。

各城郭

神籠石式山城

注⑩ 高良山神籠石 福岡県久留米市

標高320 Mの高良山の250 Mから60 Mの山地先端部に列石が、約2.7 Kmにわ

たつて廻る。(北半分の列石は不明)。防禦正面は筑後国府の方向の西側で、列石の一番低い所、比高は約30 M、二ヶ所の谷に水門があったと思われる。列石内に高良山神社があり、此列石は、元々「八葉石」と呼ばれ、此列石内の「高良神の馬のつめかた」と呼ばれるくぼみのある巨石を神籠石と呼んでいた。西北側、約1.5 Kmに筑後国府、その国府から筑後川沿いに、此城の北方を通る豊後への官道と、此城の西を通る肥後への官道が通る。

注⑫ 女山神籠石 福岡県山門郡瀬高町

標高203 Mの山を囲んで190 Mから15 Mの丘陵の先端部に列石を廻らす。

小さな三つの谷と四つの水門があり、南の尾根と防禦正面の低地の水門部分が残在し、北の尾根部分は不明。防禦正面の比高は約5 M、約3 Kmの周囲と考えられる。

注⑬ 防禦正面の土塁の一部を発掘した結果、列石上に土塁があり、三ヶ所の柱穴が出て来た。柱穴の間隔が約3 Mで唐尺の十尺に当り、唐尺を使用した可能性が強く、大化改新後に、唐尺が使用される様になった事から、その時代に築かれたとされる説がある。

又、列石内外に古墳が多数有り、西方に肥後への官道が通り、筑後国府へは約18 Km。

注⑭ 雷山神籠石 福岡県糸島郡前原町

標高955 Mの雷山の山地の中腹部分にあり、470 Mから390 Mの地点を東西

の尾根と、南北の谷の部分を通る。(北と南の谷の部分の水門部分とその延長の石垣部分のみが残存し、東西の尾根の部分不明)。列石内に480 M峰があり、一つの谷と数個の峰を列石が廻り、防禦正面の比高(北の水門)は約320 M、東方の山に雷神社があり、その神名から、此を雷山神籠石と呼ぶ様になった。

北の眼下に、伊都国^{注⑮}があったと思われる糸島半島があり、国府へは約24 Kmと遠いが、糸島半島は朝鮮半島からの航路の中継地として、重要な地である。

^{注⑯}
杷木神籠石 福岡県朝倉郡杷木町

標高150 Mの丘陵先端部にあり、列石は140 Mから60 Mの間を廻り、二つの小さな谷に水門を築き、列石のすぐ南に、広大な筑後川があり、堀の役割を果す。又、中世山城が二ヶ所列石内にあり、防禦正面(南の官道)の比高は約10 Mである。

朝倉橋広庭宮跡が約9 Kmの距離にあり、又、南に筑後と豊後を結ぶ官道が通り、筑後川の水運もあったと思われる、国府へは遠いが、交通の要地と思われる。

^{注⑰}
鹿毛馬神籠石 福岡県鞍手郡額田町

標高75 Mの丘陵先端部に位置し、70 Mから20 Mの地点を約2 Km廻り、小さな谷に一つの暗渠式排水と呼ばれる排水口があり(列石との比高がない為) 列石内に小社があり、馬牧の跡という伝承が残っている。

海陸の交通の要路からは遠く離れ、筑前国府へ約35 Km、豊後国府へ約25 Km、但し、豊前国府から、香春、飯塚を経て、太宰府へ通じる古道が近くを通る。又、藤原広嗣の乱の時にこもったとされる湯川山が北へ約20 Kmの所にあり、此地は周囲が山に囲まれた盆地で、比高もないが此盆地が、防禦に適しているのだろうか。

^{注⑱}
おつば山神籠石 佐賀県式雄市

標高66.1 Mの山を最高峰として数個の低い峰の山頂部分と低地を通る。丘陵の山頂と先端部分に位置し、58 Mから15 Mの間を通り、延長約1.8 Km、小さな谷を五つ通り、二ヶ所の水門と一ヶ所の城門が確認されている。

発掘の結果、柱穴が列石の前にあり、約3 M間隔である為に唐尺の使用が考えられた。

防禦正面の比高はなくて、防禦正面は武雄盆地側で、有明海からは山を隔てた低丘陵で要地とは云えず、国府へ約30 Kmも離れ、防禦正面の盆地は肥前国府(佐賀市)から武雄市橋町鳴瀬、藤津郡塩田、嬉野を経て長崎へ至る街道が通る。又、川船も近くまで航行していた。

此城は、鎮西八郎為朝の小社があり、為朝の築城という伝承があり、^{注⑳}此城の北方には、磐井の砦と称する地があり、磐井の乱の時に、此砦にこもったとされている。

^{注㉑}
帯隈山神籠石 佐賀県佐賀市

標高178.1 Mの丘陵先端に位置し、160 Mから40 Mの間を四ヶ所の小さな谷

を廻り、水門と城門各一が確認され、約2.5 Kmの周囲を廻る。

防禦正面は国府のある南方向で比高約5 M、此も発掘がされ、柱穴が出て来て、3 M間隔であった。城内の一部を発掘したが、倉庫等の施設は未発掘。

国府へは約5 Km、又、東方には肥前風土記に記されている烽があったとされる日の隈山がある。

注②④
御所ヶ谷神籠石 福岡県行橋市

標高247 Mの山地の山頂と山腹に位置し、240 Mから80 Mの地点を列石が約3 Kmで一部二重になって廻る。二つの小さな谷に一ヶ所の水門と二ヶ所の城門が残存する。防禦正面の比高は（北方向）60 M。

城内に景行神社があり、景行天皇の九州遠征の時の行宮所という伝承が伝わり、此、神籠石を帯石と呼んでいた。東方の平野に豊前国府が約5 Kmの距離にあり、南の山麓の川が水運に使用できたと思われる。

注②⑦
石城山神籠石 山口県熊毛郡大和町

標高350.1 Mの石城山（高日ヶ峰、星ヶ峰、築山ノ峰、鶴ヶ峰、大峰の総称）の独立山塊の山頂付近の345 Mから270 Mの地点を六つの小さな谷を廻り、三ヶ所の水門と二ヶ所の城門があり、約3 Kmの周囲がある。「ホロソ石」、^{注②⑧}「マナイタ石」と呼ばれる城門の礎石が多数残り、城内に延喜式内社の石城山神社がある。

土塁中から、石城山神社で使用された祭祀土器が出土した為に、9世

紀から10世紀に築造されたという説があるが、土塁の心部版築部分でなくて、外皮版築部分から出土した為に、土塁の補修時に混入されたと言う説が有力で、土塁の築造はもつと古いと考えられる。望楼の跡と考えられる土塁の切れ目や、空堀がある。空堀は築城当時のものではなくて、幕末に長州藩の奇兵隊の屯所が此に置かれた為に空堀を造ったとされる。此は北に都と太宰府を結ぶ^{注③⑩}第一級の官道が通り、南は瀬戸内海航路が通り、陸海の交通要所で、国府からは遠く約40 Kmもあるが、南の平地は周防地方でも屈指の古墳群があり、当時は此地方は周防国の有力な地帯と思われる。

注③⑩
永納山城 愛媛県東予市

標高132.4 Mの低独立山塊を中心に、110 Mから30 Mの小峰を結び、一つの小さな谷を渡り、水門の推定地が一ヶ所で約2.7 Kmの列石が廻る。又、九州方面の列石は一M四方の石が一段で連なっているが、此は数十cm程度の石が、数段の石垣状となって連なっている。

防禦正面は国府のある今治平野（国府へ約8 Km）の方向と、縄文、弥生の遺跡部が多い、周桑平野の両方向と思う。東方には海があり、瀬戸内海航路が通る。

注③⑪
鬼ノ城 岡山県総社市

標高403 Mの半独立山塊の山頂付近を小さな四つの谷を渡り、390 Mから280 Mの間を石垣、土塁、列石が廻る。此は石垣が高く、水門も高いもの

が五ヶ所も残存している。

延長は約2.8 Kmで、防禦正面は国府側の南で約5 Km、比高はかなり高く、急峻な比高250 M。防禦正面側は高い石垣と堅固な水門を築いているが、搦手側は一段ぐらいの列石による土塁が主である。城門は推定地を含め三ヶ所あり、^{注⑳}温羅伝説が伝わり、暗に吉備氏と大和朝廷との攻争を示唆している。

^{注㉑}

大廻小廻山城 岡山県岡山市

標高198.8 Mの低独立山塊の山を二つの小さな谷を渡り、190 Mから80 Mの間を列石が廻る。

防禦正面は北方の備前国府方向と（距離約5 Km）、南の瀬戸内海方面の二方向と思われる。比高は約50 M、わりとなだらかな山容であるが、此山塊の東方の坂折峠は古代の官道で、交通の要所と考えられる。

^{注㉒}

城山城 香川県坂出市

標高462 Mの独立山塊頂部を中心に二重の塁壁を持っている。内側の比高は約360 Mで、430 Mから370 Mの地点を約3.5 Km廻っている。外側の塁壁は370 Mから260 Mの地点を約7.5 Km廻りで比高は約250 M。

門礎や建物の礎石と思われる礎石は多数残り、城内に城山神社の旧社地とされる明神原と呼ばれる祭祀遺跡がある。

東麓に讃岐国府が約5 Kmの所にあり、東方と北方を防禦正面と考えられる。

朝鮮式山城

^{注㉓}

大野城 福岡県太宰府市

太宰府政庁のすぐ後に位置し、標高410 Mの鼓ヶ峰を最高所として、一つの大きな谷と、数個の峰を廻る様に、独立山塊の頂部に位置する。北と南に二重の土塁線を廻らし、外側の土塁は190 Mから400 Mで比高は110 Mで、延長約6 Km、内側は220 Mから400 Mで比高は180 Mで、延長約4 Km、北に一ヶ所、南に三ヶ所の城門があり、城内の尾根に七ヶ所、70棟の建物跡が確認され、梁行三間、桁行五間、各柱間が2.1 M（七尺）と同一規格で建設されている。

^{注㉔}

鞠智城 熊本県鹿本郡菊鹿町

標高168.9 Mで延長約3.5 Km、しかし、此は土塁線が不明であり、城内の建物跡とされる礎石群のある米原集落の尾根を土塁と考えてみた場合であるが、170 Mから90 Mの間を土塁線が通り、三つの城門礎石を通して^{注㉕}と思われる。大野、基瀬、両城と共に修築された為^{注㉕}にその両城と同時期の築城と思われる。

しかし、此は築後、肥後の国府からも遠く離れている。ただ、南や、西の玉名、山鹿には、多数の彩色古墳があり、有力な地域である。

^{注㉖}

基肆城 佐賀県三養基郡基山町

標高415 Mを最高所として山頂とその先端に位置する。180 Mから400 Mの

地点を土塁が廻り、比高は約100M、延長約4Km、一つの大きな谷に水門を設けて、四つの城門跡があり、土塁の内側を車道と呼ぶ幅数Mの平坦地を造っている。城内には、五ヶ所の建物跡があり、大野城と同じ、五間×三間の建物が3-4を示めて、柱間も七尺である。

又、城の南西の山麓に、^{注④①}とうれぎ土塁 関屋土塁と呼ばれる。五世紀代とされる土塁の残部があり、太宰府の前面に水城と呼ばれる土塁があるがそれと同様の役割を果たしたのであろうか。

^{注④②}
金田城 長崎県下県郡美津島町

標高275Mを最高所として、三つの小さな谷に城門を築き、周囲約2.5Km、20Mから270Mの間を土塁線が走り、比高は約20Mで、山地先端の海岸沿いに位置する。

国府からは約15Kmも離れ、浅茅湾の奥まった地であり、交通の要所とは云えないが、朝鮮半島からの来航時は最初の地の為により一層の備えが必要な為、此様な要害の地を選んだのではないだろうか。

屋島城 香川県高松市

標高292Mの南嶺を最高所とし、西側の集落の浦生の谷の奥まった地（標高90M）の所に、長さ約90Mで高さも幅も広い石塁が残存し、更に、高さ1Mぐらいの土塁が200Mぐらい続いているが、西側の部分しかわかっていないので、城郭の全周はわからないが、推定として此島の標高90Mの地を一周すると約7Kmにもなる。島頂の池や、平坦地に当時の

施設があったと考えられる。

此城は、国府からは約20Kmも離れているが、眼前を瀬戸内交通の要衝とされ、又、南方の高松平野には石清尾古墳等の有力な古墳群が存在する。

高安城 奈良県生駒郡平群町。三郷町

標高488Mの高安山を最高所として^{注④③}信貴山多聞院を含めた説等数多く有るが、西側の城郭線は生駒山から高安山の尾根線と考えられるが、東、北、南の線が不明である。しかし、高安山の東数Kmの地に倉庫の礎石群が発見された。

長門城 山口県下関市

下関市と書いたが一切不明であるが、説として、唐櫃山、茶白山、火の山、竜王山、霊鷲等があり、関門海峡付近の山と考えられている。

茨城

読みとしてはイバラノキ、マンギと呼ばれているが、所在地は一切不明で、豊元国氏が、福山市蔵王山を当てる説を出したが否定の色が強い。しかし、穴郡にあったので、福山市と深安郡の地にあった事は間違いないであろう。

常城 広島県府中市

府中市本山町の旧青目寺跡（七ツ池の周囲）の付近と、その旧青目寺の東方尾根から山麓にかけての説があるが、遺構は見つかっていない。旧青目寺の建物礎石を、城の施設の礎石と考えている。

怡土城 福岡県糸島郡前原町

標高415Mの高祖山を最高所として、五つの小さな谷を含む独立山塊の山頂部分から平地まで約6.5Kmの延長を測り、城門二ヶ所が残存する。又、平地部に大規模な土塁を築き、六ヶ所の建物礎石が残る。

此城は俗にいう、朝鮮式山城ではなくて、築造年代が七世紀後半ではなくて、八世紀半ば、後半に完成する、又、吉備真備が、唐に留学して、唐での城を模したと考えられる構造で、大陸式山城（中国式山城）と呼ばれている。つまり、築造時期、築造目的、築造設計者が違う。

備後の山城

それでは備後の古代山城について記してみたい。

前記した様に、常城、茨城があるとされるが、此は、続日本記養老三
年（七一九）十二月の条に、「戊戌、停備後国安郡那茨城、葦田郡常城」と記されている。

芦田郡は現在の府中市と福山市芦田町であり、芦品郡新市町に常という地名が残る、土地の古老が府中市本山町の亀ヶ岳の事を城山（ジョウヤマ）と呼んでいた。

安那郡とは、現在の福山市の一部と、深安郡である。茨城をマングと

呼んで、神辺町の湯野に馬木という地名から此付近の茶白山、山主山の
一帯を当てる説がある。又、茨城を（イバラギ）と読んで、岡山県の井
原市を当てる説、福山市の蔵王山を当てる説もある。
養老三年とはどの様な時代か。

続日本記の記事を見ると、天智期以来31年ぶりに遣唐使を派遣（大宝
元年、701年）又、遣唐使が倭国と名乗らずに日本国と名乗り、律令を定
めて国号を日本と称して、曆を造り、独自の年号を造り、和銅開宝と云
う最初の貨幣の発行等、独立国としての体裁を整えていった。慶雲三年
（七〇六）二月に、京や畿内の調を戸板で収める様にする等、減税措置
を取っている。扁役制度の採用。和銅三年（七一〇）、藤原京から、平
城京へ移転。霊龟元年（七一一）から天平十二年（七四〇）の間に、大
宝令で決めた国、郡、里という三段階の地方行政の単位の里が、郷と変
り、郷がさらなる二、三の小さな里に分けられ、50戸の郷戸がさらに二、
三の小さな戸に分けられ、房戸と呼ばれる様になる。養老二年（七一一）
に遣唐使多治比真人県守が帰国し、唐の仏教を中心とした諸芸術、文学、
思想等、中国文化が流入して理解が深まる。朝廷は国司の上に按察使を
置いて人民を掌握を強力にした。しかし、その結果、養老四年二月に九
州で隼人が、九月に奥羽で蝦夷が反乱した。養老六年（七二二）に官營
の百万町歩開墾計画、三世一身の法、全国的に開発政策を進めていった。
天平元年（七二九）、長屋王家の没落、天平七年（七三五）七月に、吉
備真備らが唐より帰国する。天平十二年（七四〇）、藤原広嗣の乱、聖
務天皇の従弟で、光明子の甥の広嗣が、太宰府を動員して反乱を起す。

注⑤

天平十五年(704)に墾田永年私財法を立法化する、此により、律令国家の基盤である班田収授法を破壊する事になるが、立法の理由が国分寺の建立に地方豪族を協力させる為であった事は明らかである。

つまり、畿内政権が、日本という国の体制を整えて、減税や、地方行政の掌握が徹底して行なわれてきて、地方豪族の反乱や、対外緊張はなくなってきた。

又、続日本紀による古代山城関係記事

文武二年(698) 太宰府に大野、基肄、鞆智の三城を繕わせる。

同年 高安城を修理す。

三年(699) 高安城を修理す。

同年 太宰府に三野、稻積の二城を修めさせる。

大宝元年(701) 高安城を廃して、舎屋雑儲物を大和、河内二国に移す。

注⑥ 高安烽を廃して、高見烽、春日烽を置く。

和銅五年(712) 高安城に行幸す。

同年 備後国安那郡茨城、芦田郡常城を停む。

養老三年(719) 怡土城を築く。

天平勝宝六年(756) 吉備真備を専任する。

天平宝字八年(764) 惠美押勝、高島郡三尾にて戦う。

神護景雲三年(768) 怡土城完成。

とあり、701年に高安城を廃す等、それ以前も修理のみで、養老三年の

停む以降、756年の怡土城を築くまで緊張がなかったものと思われる。

備後、常城、茨城は停むとなっているが、停むとはどういう事である

うか。

701年に高安城を廃す記事があり、舎屋雑儲物を大和、河内に移すとあり、廃すとは城内にあるものを麓に移し、城内の食料等がなくなる状態であるから、廃よりも停の方が軽いから、食料や武器等を城内に保存している状態をいうのであろうか。しかし、都に近い高安城が廃されているし、それ以降なので、常城、茨城は停止というのは、此地域が、大和地方よりも緊張であったのであろうか。

神籠石は地域政権の築造か。

官書に未記載、反乱伝承地にある。

藤原広嗣の乱 現在の福岡市北部から北九州市、筑豊地帯で反乱を行

している為に、鹿毛馬神籠石、御所ヶ谷神籠石を使用

した。

磐井の乱 久留米市を中心とする筑後を中心としていり為に、高

良山神籠石、女山神籠石を築造。

吉備の反乱 吉備の中心地は、鬼ノ城、大廻小廻山城。

吉備の反乱の伝説として温羅伝説が考えられる。温羅伝説とは、吉備

津宮縁起の事で、少し長いが引用すると、「崇神天皇のころ、百済王の

温羅という人、一族を連れて吉備に来て、新山に城をつくり、都へ奉る

調物や婦女子を掠奪し、又の名を吉備冠者と称した。此事が朝廷に知れ、

皇子のイサセリヒコノミコトが温羅征伐の将軍として派遣され、吉備中

山にて戦を始めるが、降伏のきざしささえも見えず、西の片岡山に陣を移

動させると、無防備と想つて温羅が、鬼ノ城を出て弓を射かけるが、突然岩が楯となった。此を楯築山と云う。ミコトも弓を射るが、温羅の矢と空中に喰い合つてちががかない。神のおつげどおり一度に二筋の矢をつがえて射たところ一筋は空で喰い合つて落ち、もう一筋は鬼ノ肩を射抜いて、いずこともなく飛んでいった。その矢の止まる所を箭翔といふ(矢掛と書く)。矢の喰い合つて落下した所に社をつくり矢喰神社となした。温羅が矢にあつた為川で鯉に化けて逃げようとした。そしてミコトは鵜に化けて、嘴み捕えた。温羅の傷口からしたたる鮮血によつて川は血に染まり、此川を血吸川と呼び、川の傍らにあつて温羅を祭る社が鯉喰神社である。温羅は降伏して吉備冠者の名をミコトに献上したので、それ以降、ミコトは吉備津彦命と名乗る様になつた。

つまり此伝承では、

①崇神天皇の皇子が吉備国の冠者を殺した。(大和朝廷への吉備の服従)

②鬼ノ城(キノジョウウ城ノ城)という意味か。)

③百済王の温羅(百済渡来系氏族の温羅ウラとは朝鮮語のウルとしたら、山丘が囲繞してまがきの様な形状をいう鬼ノ城の外郭を表わしているのか。つまり吉備国の渡来系氏族が吉備氏に協力して築いたのであらうか。)

それでは神籠石が大和政権が築いたとしたら。

ただ単に官書に未記載というだけか。

神籠石を防禦正面の比高別に分類すると、

高い↓雷山、石城山、城山、鬼ノ城

中間↓御所ヶ谷、高良山、大廻小廻山城

低い↓杷木、鹿毛馬、おつぼ山、帯限山、女山、永納山城

国府等の国の中心地からの距離別では、

近い↓鬼ノ城、大廻小廻山城、城山、永納山、御所ヶ谷、高良山、

帯限山

遠い↓おつぼ山、女山、杷木、鹿毛馬、石城山

海陸交通の要所か。

要所↓鬼ノ城、大廻小廻山城、城山、石城山、永納山、杷木、女山、

帯限山

つまり、朝鮮式山城と同じ様に、国府に近い。又は海陸の交通の要所にある。

更に、高さ的にも、かなり高い所にあるものが多い。それと共に、地方豪族の強力な所にある為に、地方豪族が、大和政権の要請によつて築く。地方豪族が築いたものを大和政権が手直した等が考えられる。

しかし、なぜ、備後国に常城、茨城、二城あつたのであろうか。

吉備国周辺の城郭、広島県(備後国に常城、茨城)。岡山県(総社市、鬼ノ城、岡山市、大廻小廻山城)。兵庫県(新宮町、城山城、城牟礼山城?)。香川県(坂出市、城山。高松市、屋島)。

なぜ此様に多いのであろうか。九州地方を第一線防衛地、中国地方第二線防衛地、近畿地方第三線防衛地。

此だけ数多いというのは、大和朝廷が築くとしても、その地方豪族を

動員するわけだから、此にそれだけの有数な力があつた事は確實であらう。吉備氏は製鉄、製塩、瀬戸内航路の航海で力を持っていたと考えられる。

此らについては、備讃海峡付近に高地性集落が分布している。巨大な古墳がある等で分かると思う。

後記

吉備氏の力で鬼ノ城を築いたという様に書いているが、吉備氏は、雄略天皇の時に最初の謀反を起し、清寧天皇の時に、又謀反を起し、山部を取られてしまつて、勢力はなくなるが、鬼ノ城の石垣の築城技術は七世紀後半ぐらいと考えられている。

なお、大野城では城内に後四天王寺が建立されているが、元々、城の守護としてあつたのが、緊張融和と国家仏教の国家守護の為に、城が廃されると寺院となつた。此と同様な事は他の城でもいえると思われ、高安城の信貴山朝鮮孫子寺、屋島城の屋島寺等、神籠石でも神社が内にあつたりする。城を考える上で、寺社関係との関連も考えてみなければならぬであろう。

補注

注① 芋原に大スキの跡と伝えられる伝説があり、芋原集落を囲む様に空堀があるとされている（一部残存、点線推定、図①）。

注② 中条谷の木之内集落と三谷村に跨る山で中世山城と、平安時代の寺院跡があるとされ、数ヶ所の郭と井戸、更に瓦の破片が出土した。（図①）。

注③ 図②と表①②を見ていただきたいが、地形的分類と、性格的分类をして、防禦的な施設として、溝や、土塁を築いているものがある。更に集落内から炭化米の出土や、鉄鏃、石鏃の出土によってその遺跡の性格が把握できる。図③～⑤はその遺跡の遺構図。

注④ 図⑥の様に、土塁の前面部分に石列を置いて、土塁の前面の傾斜角を急にする為に置いた。

注⑤ 図⑥の様に土塁中に柱を埋めて逆茂木の様にしていたと思われる。

注⑥ 図⑦の様に柱穴の間隔が、3Mとなっている事が多い為に、唐尺の一寸が30cmで10尺と考えられる為に、唐尺の使用が考えられ、大化の改新以降から使用された為に、此時に築城した説が有力である。

注⑦ 日本書記、続日本紀、類聚三代格、日本後紀、文徳実録、三代実録、等の時の政権が作成した書物。

注⑧ 朝鮮忠清道錦江の河口（付図①を参照）で、663年（天智天皇二年）に唐の水軍との戦いで、百済が新羅に攻められ、日本に救援を求

めて遠征し、戦ったが敗北し、百済は州柔（ツヌ）に立籠っていたが、日本の敗北後、州柔城も落ちて、百済は新羅の支配下に入り、日本の半島遠征は断念するに至った。

注⑨ 書紀には、百済の十六官位のうち、二位の官位をもつ人物が三人記されている。（答体春初）、憶礼福留、四比福夫）。

注⑩ ⑧、⑨の図面は約1/7700ぐらいの縮尺、⑩は三年山城城壁部分。

注⑪ ⑭ 1/25000 地形図

注⑫ ⑮ 1/25000 地形図

注⑬ ⑯ の様に発掘結果柱穴が出土。

注⑭ ⑰ 1/25000 地形図

注⑮ 「魏志」倭人伝の伊都国の事で、「古事記」の仲哀記では伊斗村、「日本書紀」の仲哀記では伊観県と書かれ、のちに筑前国の郡名となる。

注⑯ ⑱ 1/25000 地形図

注⑰ ⑲ 1/25000 地形図

注⑱ 律令官制の一つで、地方官制のうち最大。朝鮮経営の兵站基地の那津宮家で、天智天皇二年の白村江の戦い後、太宰府市に後退させて、前面に水城、後方に大野、基肄両城を築いた。九国、二島の民政を総括し、外交、国防の任を併せもつ重要官庁であるが、遣唐使の中止以降は未航の宋商船との交易の管理をしたが、平安末期にはその実権を寺社その他に奪われて、衰退した。

注⑲ 僧正玄昉、右衛士督吉備真備を除こうとして、藤原広嗣が天平十二年（七四〇年）に北九州で挙兵した。管下の軍勢約一万を率いて、朝廷は東北で活躍した大野東人を大將軍とし、五道から徴集の兵一万七千を授けて征討させて、広嗣は斬られたが、乱を機に藤原仲麻呂が拾頭し、やがて玄昉、真備もその地位を失う。

注⑳ ㉑ 1/25000 地形図

注㉑ 源為朝の事で、豊後にて、九国総追捕使となつて勢力をふるうが、朝廷の命に従わなかった為、父が解官され、これを契機に帰洛。保元の乱の時に父と共に崇徳上皇側について、戦ったが、兄義朝の軍に敗れ、伊豆大島に配されて、後に伊豆介狩野茂光に攻められて自殺した。

注㉒ 新羅の進攻により危機に陥つた任那を回復する為に継体天皇二十一年（五二七年）、大和朝廷の派遣した近江毛野を将とした任那救援軍に対して、北九州に支配を確立していた国造築紫君磐井が新羅の勧誘に応じて北九州を抑え、海路を断つた。此為、朝廷は物部麁鹿火を派遣し、翌年、磐井は討伐軍に斬殺された。

注㉓ ㉔ 1/25000 地形図

注㉔ 和銅六年（七一三年）に官命により、諸国国庁が編纂した。現在五風土記（出雲、播磨、常陸、豊後、肥前）があり、ほぼ完全に残っているのは出雲のみで、その完成も天平五年（七三三年）である。

注㉕ 佐賀県神埼郡神埼町西郷、肥前国には二十ヶ所烽が残っていると

されているが、此は国府から一番近く、眺望も良い。

注②⑥ 図②③ 1 地形図 25000

注②⑦ 図②④ 1 地形図 25000

注②⑧ 「延喜式」の神名帳に所載の官社の事。

注②⑨ 祭神は、大山祇神を主神、雷神、高籠神の二神を配祀している。

注③⑩ 山陽道

注③⑪ 図③④ 1 地形図 25000

注③⑫ 図③⑤ 1 地形図、図③⑥ 第一、第二水門付近の地形図、断面図。
図③⑦ 第一城門跡付近地形図、図③⑧ 城内の建物礎石。

注③⑬ 後記しているが、此が桃太郎伝説になったともされている。

注③⑭ 図③⑨ 1 地形図 25000

注③⑮ 図③⑩ 1 地形図 (①城門、②水門、③明神原、④礎石郡、⑤山頂礎石郡、⑥礎石郡、⑦礎石郡、⑧礎石郡、実線城郭線の残存部、

点線城郭線の推定)。

注③⑯ 図③⑪ 1 地形図 25000

注③⑰ 図③⑫ 1 地形図 25000

注③⑱ 「続日本紀」の文武天皇二年(六九八年)に、「大宰府」が修築した記事がある。

注③⑲ 図③⑬ 1 地形図 25000

注④⑰ 佐賀県三養基郡基山町宮浦字玉虫に所在し、五世紀中頃の築城とされている。幅6M、高さ1M、長さ約40Mが残存している。

此土塁は関屋土塁との関連もあると思うが、付近に、千塔山遺跡

があり、その関連もあると思われる。千塔山遺跡は、弥生時代後期から終末期の遺跡で、U字構、V字構で集落を廻らした遺跡である。

注④⑱ 佐賀県三養基郡宮浦字宿に所在し、五世紀中頃の築城とされ、幅

15M、高さ4.5M、長さ20Mほどが残存し、此地は肥前、筑後から大宰

大宰府に通じる要路で、基肆郡の駅も此付近と考えられている。

注④⑲ 図④① 1 地形図 25000

注④⑳ 信貴山朝護孫子寺で、毘沙門天を祀るが、元々は高安城の守護の四天王の関係であろうか。また、「信貴山縁起絵巻」に、飛倉伝

説がある。

注④㉑ 図④② 1 地形図 25000

注④㉒ 豊元国著「奈良時代山城」

注④㉓ 高垣不敏著「備後国府考」

注④㉔ 「地理志料」

注④㉕ 注④⑲

注④㉖ 南九州に存住していた族名で、律令支配の侵透に伴い、しばしば反乱を起している。

注④㉗ 一般的に「えぞ」と云うが、「えみし」、「えびす」とも云う。

古くは東国原住民の人々を呼ぶが、後に、大和政権の行政版図外の人々を指す様になる。

注④㉘ 養老七年(七二三年)に公布された法で、新池溝を開いて作った

田は三代間、旧池溝を利用して作った田は一代間、収公免除した。

注⑥ 父は太政大臣高市皇子で、宮内卿、式部卿、大納言を経て、右大臣、左大臣へと進んだが、天平元年に謀反の疑いをかけられ、聖務天皇の命により、自殺。藤原氏による権力攻勢上の謀略と考えられている。

注⑦ 天平十五年（七四三年）に公布、三世一身法の用益年限を廃し、永代私有の許可。

注⑧ 位置は不明であるが、古代筑紫の美野（ミノ、ミヌ）駅の付近とされる。此駅は、現在の福岡市に近く、那の津（大津）、美町、大宰府と、港から大宰府への府の大道に置かれた駅とされる。

注⑨ しかし、最近では海外防衛の為の城ではなくて、大隈、隼人支配の為に大和政権が国府防衛の城という説も出てきている。

注⑩ 位置は不明、糸島郡志摩町可也の稻留という説があるが、前記の様に、大隈、隼人支配の城という説もある。

注⑪ 高安山にあり、此は中世の信貴山城の出城のあった所で、此の地形が、秋田県羽白目遺跡（古代秋田城と秋田郡衛とを結ぶ、中継烽遺跡）に酷似し、軍防令にいう火炬の相互間隔が二十五歩（45M）に近い。発掘調査されたが、遺構は確認されず、土師器、須恵器片が出土しただけであった。

注⑫ 滋賀県高島郡高島町にシシガキが有り、それが三尾城という説がある。

付 表

日本書紀による古代の対外、対内緊張期

注① 崇神天皇

10年 注② 四道將軍を諸國へ向ける。

注③ 武埴安彦の乱

60年 注④ 出雲振根を殺す。

注⑤ 垂仁天皇

5年 注⑥ 狹穗彦の乱。（稻城を築く）

注⑦ 景行天皇

12年 注⑧ 熊襲が反く。天皇征討に出発し、筑紫で土蜘蛛を討つ。後に、熊襲師を殺す。

注⑨ 熊襲反く。日本武尊、熊襲を討ち、帰路、吉備の穴海にて荒ぶる

27年 注⑩ 神を討ち、更に、難波柏波の荒ぶる神を討つ。

注⑪ 東の戒反く。日本武尊東征に出発。

40年 注⑫ 仲哀天皇

9年 注⑬ 熊襲反く。吉備臣の祖、鴨別を遣し、討つが、羽白熊襲が反く為に討ち。

注⑭ 山門村にて土蜘蛛田油津媛を討つ。

注⑮ 新羅遠征

注⑯ 神功天皇

元年 香坂王、忍熊王の反乱。^{注21}

5年 新羅の人質、微叱許智伐早が逃げ帰った為に、新羅を攻め、蹈鞫津、草羅城を攻める。^{注22}

^{注23} 応神天皇

3年 所処の海人、命に従わず、阿曇連の祖大浜宿禰を遣して、平定し、海人の統率者とする。^{注24}

14年 葛城襲津彦を遣して、加羅に留る弓月の人夫を連れ帰ろうとするが、新羅の防害の為に帰れず。^{注25}

16年 平群木菟宿禰、内戸田宿禰を加羅に遣し、弓月の人夫と襲津彦が、新羅の防害の為に帰れず。^{注26}

22年 天皇が吉備の葦原宮に行幸し、御友別が参じ、吉備国の川嶋縣を稲連別に封じ、上道縣を仲彦に封じ、三野縣を弟彦に、波區藝縣を弟鴨別、苑縣を兄浦凝別に封じた。^{注27}

仁徳天皇^{注28}

40年 牟別皇子の殺害。^{注29}

53年 上毛野君の祖、竹葉瀬田道を新羅に遣す。

履中天皇^{注30}

87年 住吉仲皇子が兵を發す。^{注31}

允恭天皇^{注32}

5年 葛城襲津彦の孫、玉国宿禰が尾張連吾襲を殺した為に殺される。^{注33}

42年 木梨輕皇子が暴挙をする為に人民臣民が従わず、穴穗皇子（安康天皇）に従う為に、兵を發するが、穴穗皇子も兵を發して木梨輕皇子を殺す。^{注34}

元年 天皇、大草香皇子の妹、媛を大泊瀬皇子の妻にしよとした時に、坂本臣の祖根使主を遣すが、根使主が虚言を云った為に怒って大草香皇子を殺す。^{注35}

3年 眉輪王の為に天皇殺される。^{注36}

雄略天皇^{注37}

3年 安康天皇が殺された時に、兄弟を疑い殺す。眉輪王と逃げこんだ圖大臣を殺す。^{注38}

市辺押磐皇子が皇位繼承の有力だった為に殺す。^{注39}

7年 吉備下道臣前津屋が謀反を起す気を見せた為に、物部の兵を遣して前津屋一族を殺す。^{注40}

8年 吉備上道臣田狭を任那国司にして、田狭の妻稚媛を妻にしよとした為に新羅に助けを求めて反旗をひるがえた為に、田狭の弟吉備海部直赤尾を遣して田狭を殺そうとしたが殺さずに帰国した。新羅が高麗から攻められるが、百済に救援を求め、任那より出兵し、高麗を破る。^{注41}

9年 凡河内直香賜と采女を難波日鷹吉士を遣して、殺そうとしたが、香賜が逃げた為に、弓削連豊穂を遣して三島郡の藍原にて殺す。^{注42}

13年 吉備上道采女大海、紀小弓宿禰等を新羅に遣して破る。^{注43}

播磨国御井隈の文石小麻呂が法に従わず、春日小野臣大樹を遣し

て殺す。

14年 根使主が逆いた事がわかり、殺そうとした為に、稻城を造り戦うが、殺される。

20年 高麗の王、兵を発して百済を亡ぼす。

21年 注⁶⁵ 久麻那利を済州王にした。

23年 百済の新王が死亡して昆支王の子、殊多王を国王にして、筑紫の兵五百人を遣して国を衛らせて東城王とする。

筑紫の安致臣、馬飼臣等航師を率いて高麗を討つ。

征新羅將軍、吉備臣尾代が国に寄り、後から来る蝦夷の兵を待つが、天皇の死去により、蝦夷が反き、郡を侵した為、沙婆水門にて戦い、丹波国の浦掛水門にて亡ぼす。

清寧天皇

注⁶⁶

星川王子が大蔵の官について、官物を自由にし、皇太子に反く為に、兵を発し、吉備稚媛、城丘前來目が星川王子に従って殺される。

吉備上道臣等、星川王子を救おうとして、船を遣したが、すでに死亡したと聞いて帰るが、天皇は上道臣を責めて、山部を奪う。

顯宗天皇

注⁶⁷

3年 紀生磐宿禰、任那に行き、三韓の王になろうとした。任那の左魯那奇他甲背等が計略を用いて百済の適莫爾解を殺し、帶山城を築き、東道を防ぎ守り、津を断つ。百済王が怒り、兵を発する。後に、紀生磐宿禰の兵力も弱まり、任那に帰る。

注⁶⁸ 継体天皇

8年 伴跋、城を子吞、帶沙を築き、烽等を置き、日本に備え、新羅を攻める。

9年 物部連、沙都嶋に至り、船師五百を率いて、帶沙江に至る。

伴跋、兵を發して物部連を討つ。

21年 近江毛野臣、兵六万を率いて任那に往き、新羅に取られた、南加

羅、喙己吞を復興し、任那と合わせようとしたが、新羅から貨物を送られた、磐井が、反き、火、豊二国に勢力を張って、高麗、

百済、新羅、任那等の貢物の船を止め、毛野臣の軍を止める。

22年 天皇、物部大連鹿火を遣して磐井も御井郡にて戦い殺す。

23年、近江毛野臣を遣して、南加羅、喙己吞を建国する。

24年、百済、新羅と毛野臣の城を攻める。

注⁶⁹ 安閑天皇

2年 天皇、大伴金村大連の子、磐と狭手彦を遣して任那を救ける。

注⁷⁰ 欽明天皇

6年 高麗大いに乱れる。

7年 高麗大いに乱れる。

8年 百済、高麗との戦いで馬津城を破る。

15年、百済、新羅を攻め、物部莫奇武連を遣して函山城を攻め、新羅に攻め入り、久陀無羅寒を築く。新羅、兵を率いて行く。明王が殺された為、筑紫国造が囲みを破って逃げる。

17年 阿部臣、佐伯連、播磨国直を遣し、筑紫国の船師を率いて国を衛

り、更に、筑紫火君、兵千人を率いて彌弓に送り、津の路の要害を守る。

22年 新羅、阿羅波斯山に城を築き、日本に備う。

23年 新羅、任那の官家を滅す。大將軍大伴連狭手彦を遣して、高麗を破る。

注⁶⁵
敏達天皇

10年 蝦夷数千人が辺境にて敵意を示す。

12年 百濟人、「船三百船の大船が筑紫に行きたいと云う」。此為、対馬、壹岐に伏兵を置き、要害に城を築く。

注⁶⁶
崇峻天皇

物部大連が兵を發し、餘皇子等を捨て、穴穗部皇子を天皇にする。

蘇我馬子、宿禰等、炊屋姫尊を奉じて、佐伯連丹経手、土師連磐

村、的臣真嚙に詔して、「穴穗部皇子、宅部皇子を殺せ」と命じ

た。蘇我馬子宿禰大臣、諸皇子と群臣に物部守屋大連を滅す事を

謀り、泊瀬部皇子、竹田皇子、厩戸皇子、難波皇子、春日皇子、

蘇我馬子宿禰大臣、紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣賀陀夫、

葛城臣烏那羅が共に大連を討つ為に進軍、更に、大伴連嚙、阿倍

臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣が、物部守屋の家に至る。

注⁶⁹
物部守屋、子弟や奴軍を率いて稻城を築いて戦う。

注⁶⁸
推古天皇

8年 任那と新羅が相攻む。任那の為に新羅を討つ。新羅は降服するが、又、新羅が任那を侵す。

9年 任那、救援の事を計る。

10年、来目皇子、征新羅將軍として出発。

11月 新羅途上の筑紫にて来目皇子死去。

31年 新羅、任那を討つ。数万の兵を率いて、新羅を討つ。

注⁶⁷
舒明天皇

9年 蝦夷反く。大仁上毛野君形名を遣すが、敗れ、城に逃げ帰る。

皇極天皇

3年 蘇我大臣蝦夷、子入鹿臣、家を甘櫛丘に建て、家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。

4年 中大兄、大極殿にて入鹿を斬る。(大化改新)。中大兄、法興寺

に入り、城として備える。

孝徳天皇

大化 磐舟柵を築り、蝦夷に備え、柵戸を置く。

注⁶⁷
齐明天皇

4年 阿部臣、船師一八〇艘を率いて、蝦夷を討つ。

注⁶⁸
天智天皇

2年 新羅、百濟の南の辺の四州を取る。上毛野君を大將軍として派遣

する。大唐の軍將、戦船一七〇艘を率いて白村江に陣取り、そこ

で戦うが敗れる。百濟の將軍日本に向う。

3年 対馬、壹岐、筑紫等国に、防と烽を置き、筑紫に大堤を築いて水

を貯え、水城と名付ける。

4年 達率答林春初を遣して、城を長門国に築く。達率憶礼福留、達率

注⑧ 四比福夫を筑紫国に遣して、大野、基肆二城を築く。

6年 倭国の高安城、讃岐国の山田郡の屋島城、対馬国の金田城を築く。
8年 天皇、高安城に登りて城を修めというが止める。

高安城を修めて畿内の田税を収む。

9年 高安城を修めて、穀と塩を積む。又、長門城一つ、筑紫城二つを

築く。

注⑦ 天武天皇

元年 壬申の乱発生。

付表補注

注① はつくにしろす天皇と呼ばれ、此天皇が事実上の初代とする説が有力。(畿内から畿外への兵士(四道將軍)の派遣、出雲振根の殺害(出雲氏の服従)等で、近畿圏の政治勢力が拮がった。

注② 大彥命(開化天皇の兄)を北陸へ、武渟川別命(阿部臣等の祖先)を東海へ、吉備津彥命を山陽道へ、丹波道主命(開化天皇の皇子)を丹波へ派遣した。

注③ 孝元天皇の皇子

注④ 出雲国造の祖先

注⑤ 埴輪を作りだす。

注⑥ 開化天皇の皇子で、妹が皇后で、皇后に天皇を殺せと命じたが、皇后と狭穂彥が天皇の兵によって死ぬ。

注⑦ 日本武尊を熊襲や蝦夷に遣す等、全国的に支配が確立した所伝が多いが、伝説的な考えとされる。

注⑧ 九州南部の隼人と同族で別称。

注⑨ 筑紫国のみでなくて、筑紫島と書いて九州そのものを指す事が多い。又、豊前国長狭県に行宮を立てると記されており、御所ヶ谷神籠石がその行宮所という伝説がある。

注⑩ 大和朝廷に従わない地方の首長をさげすんで呼称した名称で、肥前、豊後国風土記に、石壘や土壘を築いて生活している話が伝わる。

注⑩ 熊襲の首長

注⑪ 小碓尊の事で、古事記、日本書紀によって、その内容に相違があるが、記が旧辞に基づく伝承に対して、紀が旧辞を基に王権の辺境征服という新しい思想や説話を付加し、多人数によってなされた歴史的事実を一人の英雄によってなされた様に作成された。

注⑫ 岡山県（備前、備中、美作）と広島県東部（備後）の四国を吉備といひ、福山市芦田川河口付近を穴という（他に諸説あり）。

注⑬ 大阪市の淀川河口付近

注⑭ 大和朝廷に従わない東部日本人々を指しているが、民俗学、人類学的にはアイヌ人と考える。

注⑮ 神功皇后と共に熊襲征討の為に筑紫に行くが、新羅を討てという神託に従わなかった為に急死する。

注⑯ 古代吉備の地方豪族で、後に吉備上道臣、吉備下道臣、吉備笠臣等に分かれた。

注⑰ 吉備武彦命の二男を御友別命、三男を鴨別命とされている。

注⑱ 福岡県山門郡山川村

注⑲ 三韓征伐の中心人物で、此以降、朝鮮関係の記事が多くなる。

注⑳ 仲哀天皇が死去し、神功皇后が応神天皇を生み、郡臣が応神天皇に従うと思ひ、反乱を起すが、香坂王は反乱の前に死去する。

注㉑ 伐早は新羅十七等官位の第一位にあたる。

注㉒ 韓国、釜山の南、多大浦

注㉓ 韓国梁山で新羅からは任那への進出拠点で、日本からは新羅への

軍事拠点と重視している。

注㉔ 帰化人が増える等、輸入や高句麗好太王碑の語る朝鮮半島への進出と大和國家の発展が考えられる。

注㉕ 漁業と航海に従事した海辺の漁民で、入れ墨をする風習があった事から異民族ともされるが、すべてが異民族とは考えられない。

注㉖ 全国各地の海人（海部）を中央で管理する伴造

注㉗ 四世紀前後の実在の將軍とされるが、最初の対鮮外交の將軍として一部の事実がさらに伝説化されている。

注㉘ 大和の豪族

注㉙ 岡山県岡山市の足守とされている。

注㉚ 岡山県浅口郡

注㉛ 吉備真備の祖先

注㉜ 岡山市東半、上道郡、西大寺市

注㉝ 吉備上道臣田狭や星川王子の祖先

注㉞ 岡山市北半、御津郡御津町

注㉟ 岡山県笠岡市とされる。

注㊱ 吉備郡真備町北部か。

注㊲ 朝鮮派遣、中国への遣使を積極的に行い、灌漑水利等にも力を入れる。

注㊳ 仁徳天皇の異母兄弟

注㊴ 履中天皇の同母弟

注㊵ 443年、451年に中国に遣使した倭王済にあてるとの説がある。

注④② 尾張国の豪族で、後に壬申の乱の時に活躍する等、古くから皇室との関係が深い。

注④③ 倭王興にあてる説がある。

注④④ 仁徳天皇の皇子

注④⑤ 雄略天皇

注④⑥ 和泉（大阪府の一部）の豪族

注④⑦ 大草香皇子とその妻の中帯姫の間に生まれた子供

注④⑧ あやはとり、くればとりの迎入れや、三蔵（斎蔵、内蔵、大蔵）の分立を行なう等、強力な専制君主とされる。

注④⑨ 八釣白彦皇子（雄略天皇の同母兄）。坂合黒彦皇子（雄略天皇の同母兄）。

注⑤① 葛城氏、雄略天皇と皇位継承について対立関係にある市辺押磐皇子が葛城氏の出である為に、眉輪王が葛城氏を頼り、雄略天皇がそれを口実に葛漆氏を滅し、市辺押磐皇子を孤立させた。

注⑤② 摂津、河内地方に勢力があった豪族

注⑤③ 大阪府茨木市付近

注⑤④ 百済の都の熊津とされる。

注⑤⑤ 福山市松永町、尾道水道の東とされている。

注⑤⑥ 京都府久美浜町ともされる。

注⑤⑦ 吉備上道臣田狭の元妻である稚媛の子供

注⑤⑧ 紀生磐宿禰が反乱を起こしたという様になっているが、百済の帯山城占領の口実として百済側からの虚言とも考えられ、紀生磐宿

禰は任那防衛を積極的に計画、実行し、百済の南進を食い止め様としたとも考えられる。

注⑤⑨ 大伴金村、物部麁鹿火らに越前より迎入れ即位（皇室以外の人物と考えられる）。

注⑥① 任那北部の有力な勢力

注⑥② 名代（天皇の名を記念して置かれた部として天皇の身边に近侍する部として設定）や、倉（貢納された稲を収納する朝廷管理の倉とされるが、倉に付属した土地所有を伴う、朝廷管理の農業経営地を意味する）が著しく増加する。

注⑥③ 安閑、宣化天皇と並立していたとも考えられ、崇仏の対立で物部、蘇我氏の対立、任那、百済をめぐる動きが活発になり、欽明天皇23年に任那宮家は滅亡した。

注⑥④ 欽明天皇の遺言である任那の再建を果たせず、崇仏対立で部族対立がさらに激化した。

注⑥⑤ 蘇我馬子と共に穴穂部皇子（欽明天皇の皇子）と物部一族を倒すが、崇俊天皇5年には蘇我馬子にそそのかされた東漢直駒に殺された。

注⑥⑥ 対隋外交の復活、国史、法隆寺の建設等、国家勢力の侵透、天皇号が最初にあらわれる。

注⑥⑦ 蘇我蝦夷、入鹿の勢力拡大

注⑥⑧ 板蓋宮に実在したかは不明。確実に存在したのは天武天皇の飛鳥浄御原宮から。

注⑥7 柵に配置した屯田兵

熊本 (平凡社版)

注⑥8 防人、遣唐使、近江令の成立、戸籍の作成

日本書紀 (岩波書店版)

注⑥9 百濟官位16官の内、第二位

続日本紀 ()

注⑦0 壬申の乱の発生。旧大氏族が沿落し、皇室の権威が強化された。

〃 (国史大系版)

播磨風土記注釈

古代研究 16卷19卷

総社市史 考古資料編

鬼ノ城

大廻小廻山城調査報告

広島県史 原史古代編 考古資料編

新編香川叢書 考古編

倭国大乱と高地性集落

高地性集落論

日本古代史辞典 朝倉書店版

国土地理院発行 1 地形図 25000

参考文献

式内社調査報告書 22卷24卷

日本城郭史研究叢書 10卷13卷

福岡県史跡名勝天然記念物 6卷

対馬

鹿毛馬

帯限山神籠石天童山東部報告

帯限山神籠石

おつば山神籠石

屋島城

新版考古学講座

古代を考える、「不破の関」

行橋市の文化財 第一集

大野城 IV、V

風土記 (東洋文庫)

全国歴史地名大系 (奈良、山口、佐賀、岡山、広島、香川、愛媛、

表 1 弥生時代集落の地形的分類

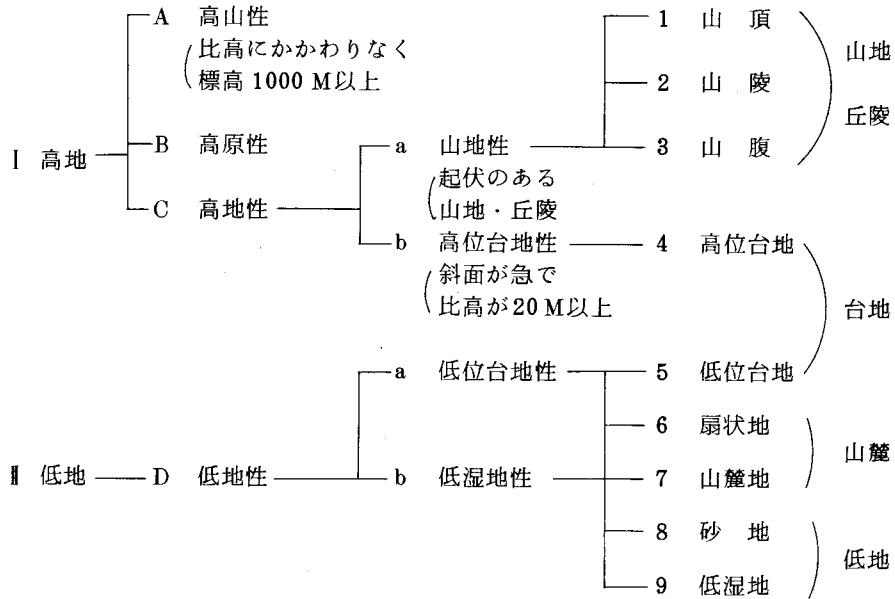
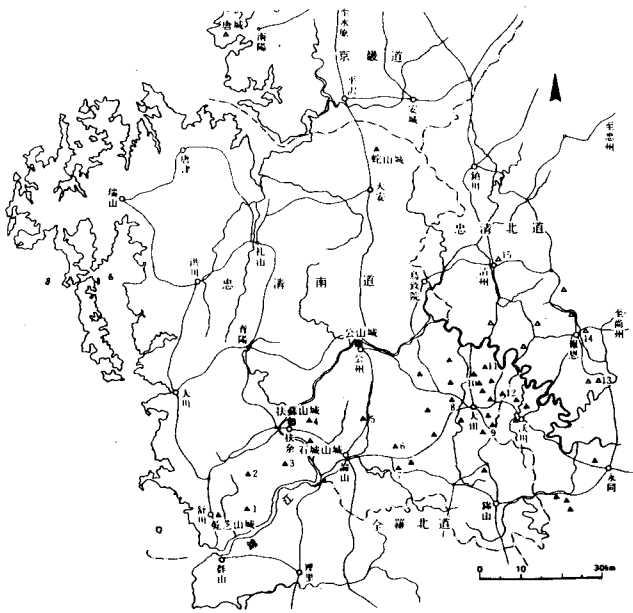


表 2 弥生時代集落の性格分類

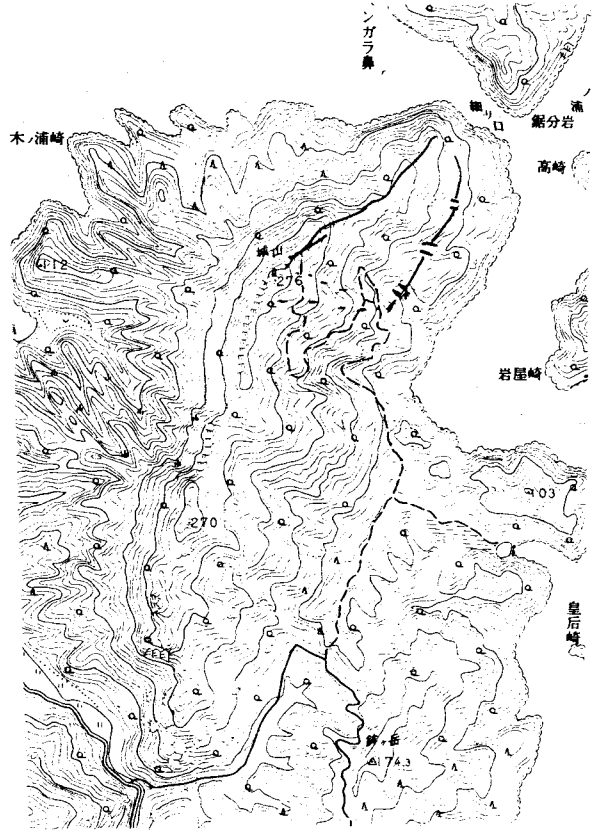
- A 農耕常時集落
- B 漁業常時集落
- C 狩猟集落
- D 焼き畑一時居住集落
- E 農耕主防塞集落
- F 農耕副次防塞集落
- G 祭祀集落
- H 防峯集落
- I 見張台集落



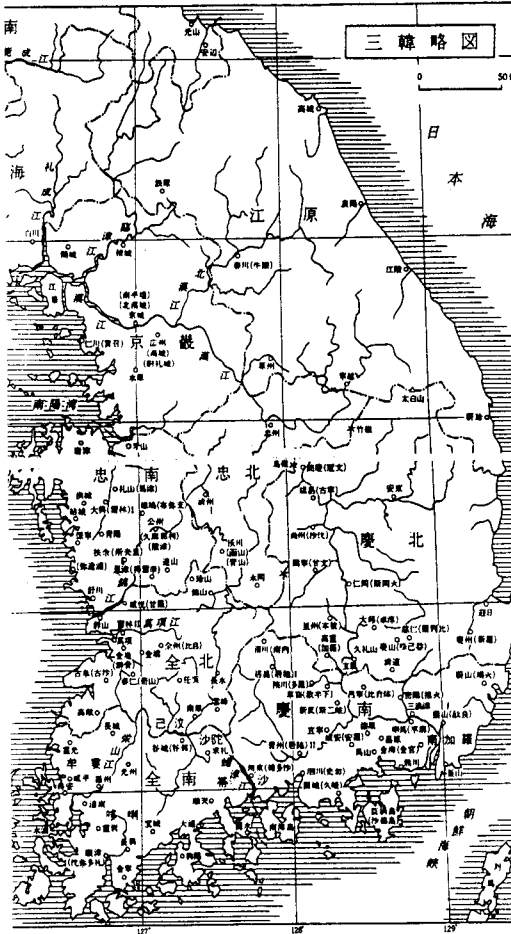
- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1 舞山城 | 6 城芝山城(黄山城) | 11 鞠足山城 |
| 2 鹿嶋山城 | 7 山道理山城 | 12 理山城 |
| 3 聖興山城(加勢城) | 8 備城山城 | 13 山桂里山城(昭山城) |
| 4 青馬山城 | 9 城崎山城 | 14 三年山城 |
| 5 豊城山城 | 10 茨城 | 15 山城望山城 |

白河と新藤の山城位置図(▲:白河 △:新藤)

付図②



図⑧



付図①



図⑨

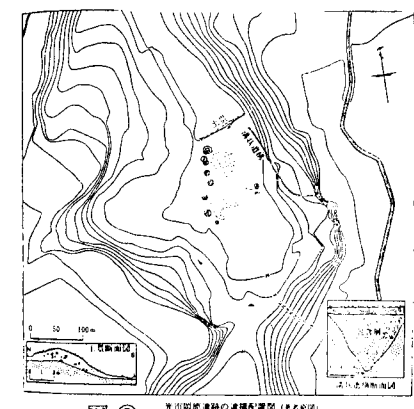
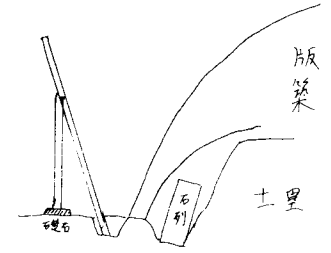
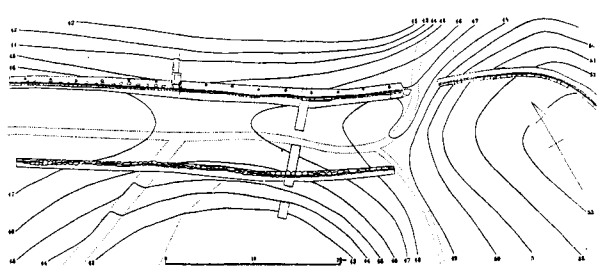
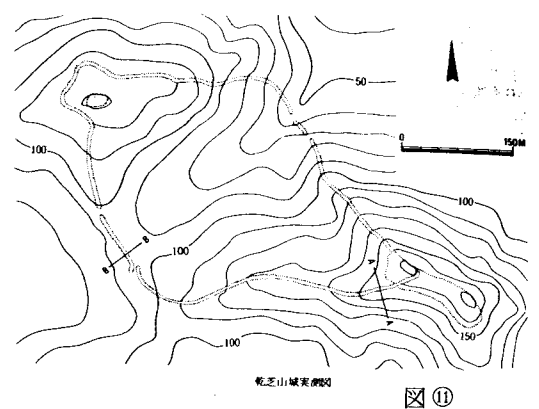
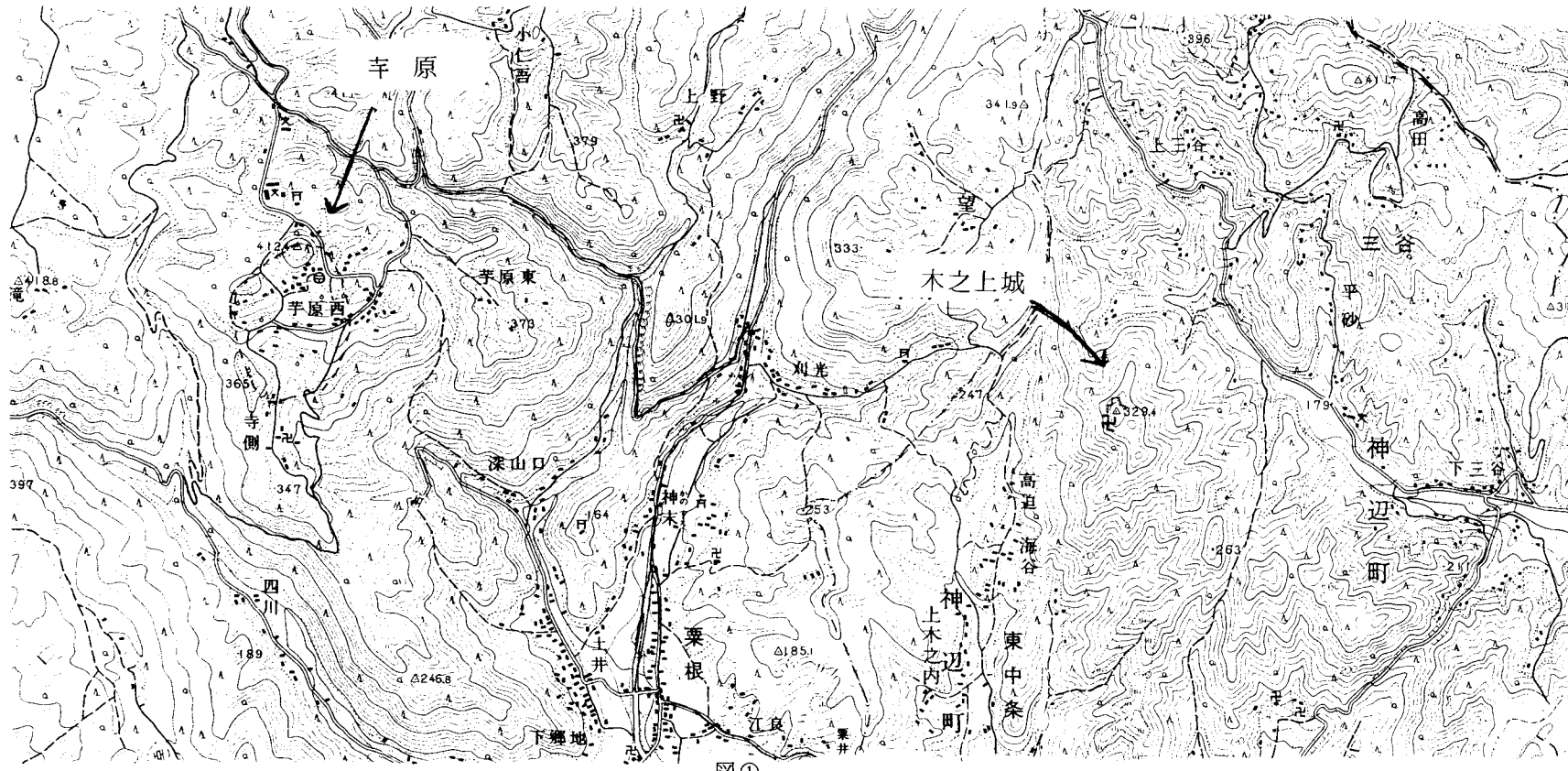
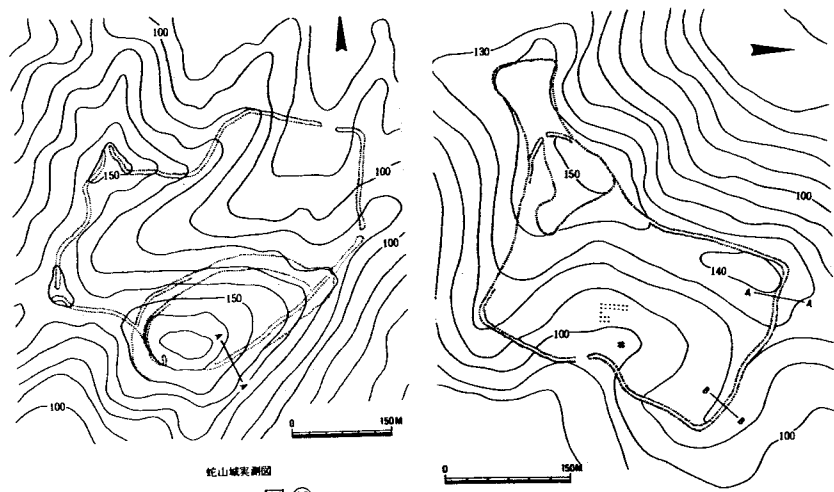
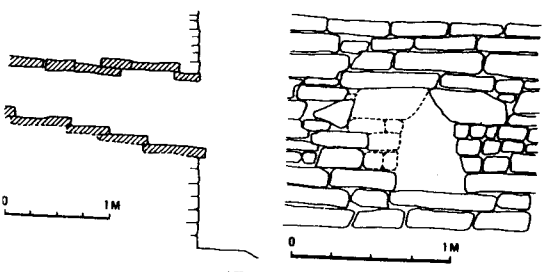
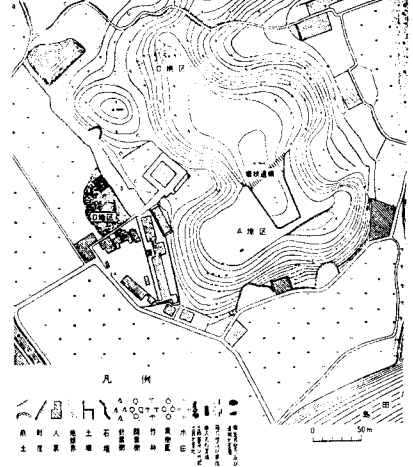
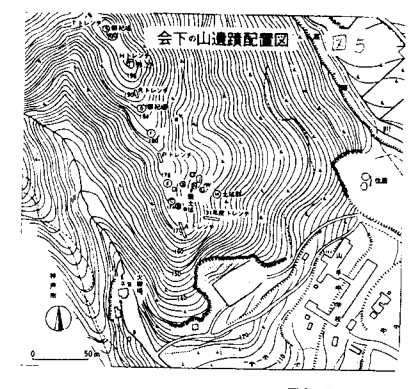
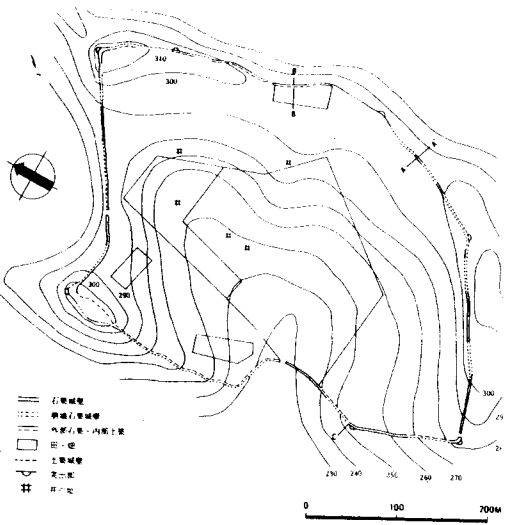
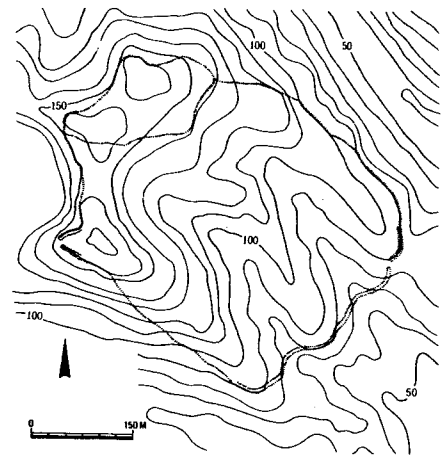
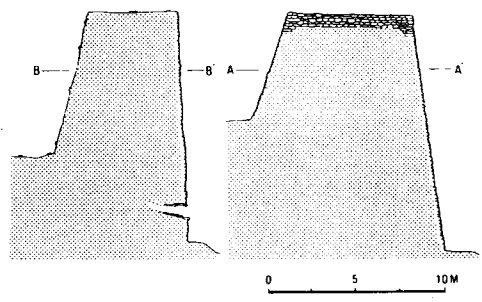


図 16 惣土塁遺跡の断面図
 断面図(A)：土塁、(B)：土塁、(C)：土塁、(D)：土塁、(E)：土塁、(F)：土塁、(G)：土塁、(H)：土塁、(I)：土塁、(J)：土塁、(K)：土塁、(L)：土塁、(M)：土塁、(N)：土塁、(O)：土塁、(P)：土塁、(Q)：土塁、(R)：土塁、(S)：土塁、(T)：土塁、(U)：土塁、(V)：土塁、(W)：土塁、(X)：土塁、(Y)：土塁、(Z)：土塁



三年山城壁断面図

水門実測図

図 13

石壁山城実測図

三年山城実測図

図 8

会下山遺跡配置図

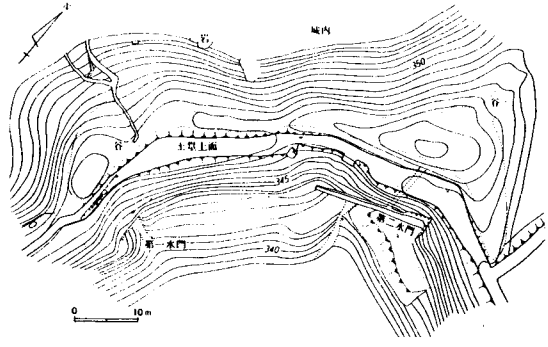
図 5

三年山城王遺跡の立地と地形 (高田川)

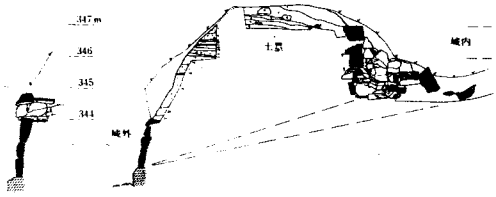
図 4

図 4

図 25



地方折の城郭概観 (S=1:600)



城郭の平断面図 (S=1:120)

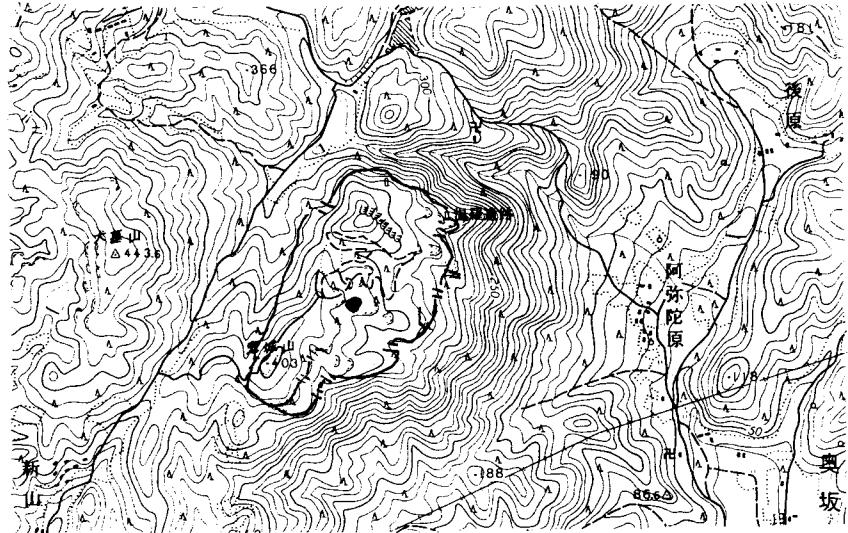
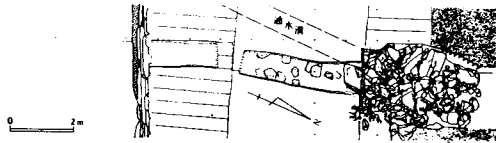


図 26

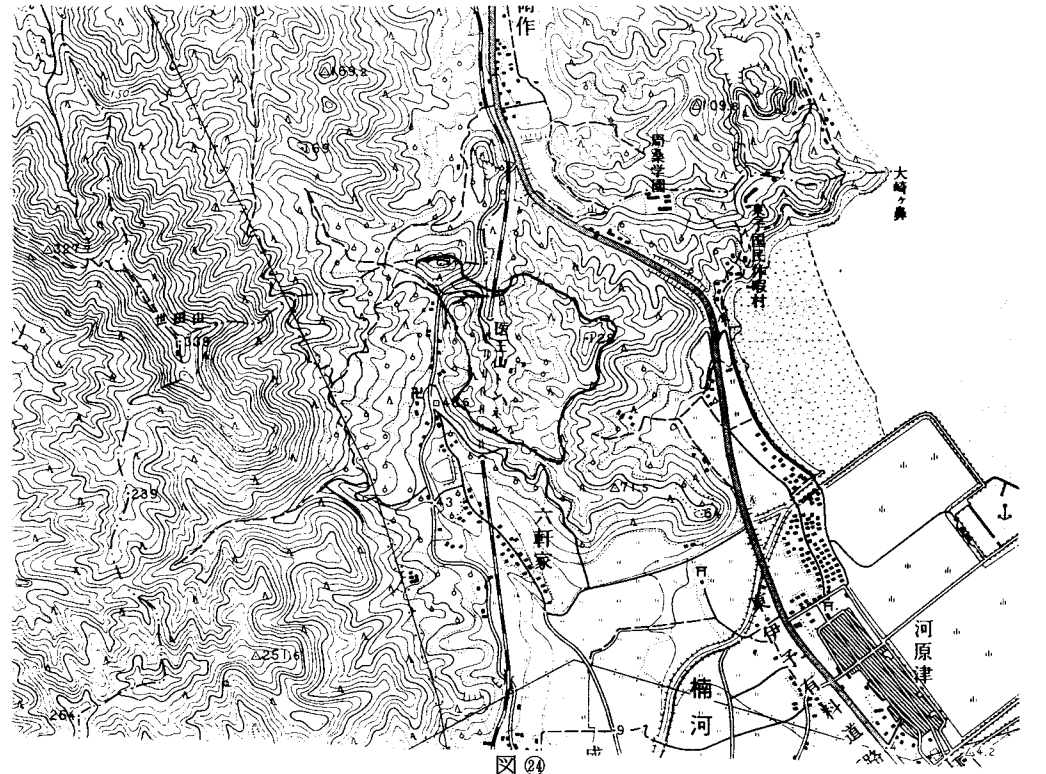


図 27

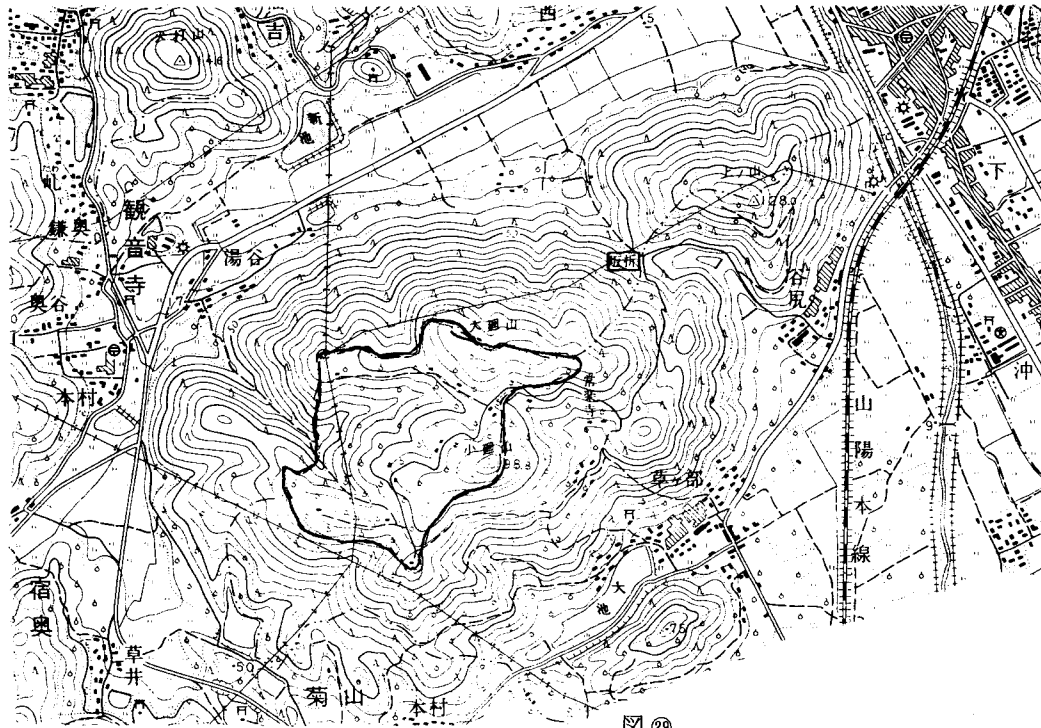


図 28

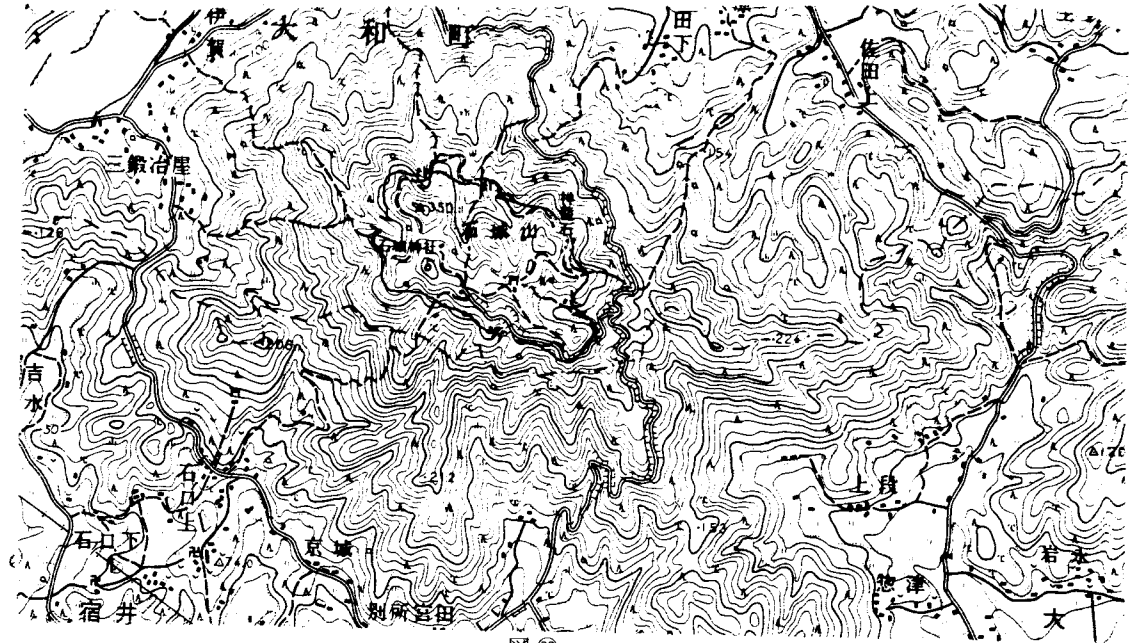


図 29

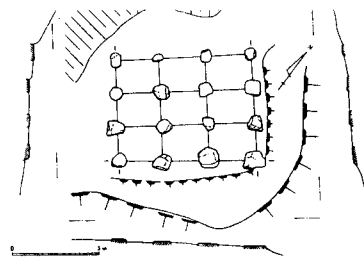


図 30

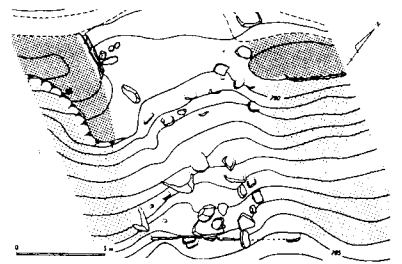


図 31

